第 10 話;初めての同属

(1)

楽園のような悪夢の中、珀世(ハクヨ)は、戸惑いの声を上げる。
違う、こんなの違うと、しかし、偽りの喜悦がその声を抑えつける。
この前、唱太が目の前に現れたとき、ミクの正体も同時に悟った。
心の底の珀世が気付いた。自分の息子が、のっぴきならない事態に
引き込まれていることと、他でもない自分がその当事者であること。
自分がすでに自分じゃなく、他の何かになってしまったこと。
そして、そんな自分の生命力すらも、この身体は、この呪われた身体は
糧としていること、いずれ、自分はこの化け物に乗っ取られてしまうで
あろうことを理解する。ミクの歌に対する嫉妬と、息子を過酷な運命に
引き込んだ恨みが、力となって、彼女を化け物へと近づけていく。

「 仕方ないわね…。」

ハクは、一瞬だけ珀世に戻ると、諦めたようにつぶやいて、巣の中で
悪夢の続きを見ようと目を閉じた。

(2)

「 ここは…? 」

どうやら、診療所のようだ。気絶した後で、誰かに運び込まれたらしい。
隣のベッドには、ミクが横たわっている。ミクの横には、ワインレッドの
装いの、ショートカットで、スポーティーな大人の女性が看病をしている。

女性は、唱太に気付くと安心したかのように微笑んで、唱太のベッドのそば
に座った。近くで見ると、人懐こそうな顔の親しみの持てる、柔らかな雰囲気
の女性だ。年のころは、21 歳くらいだろうか?もしかしたら、もっと若いのか
もしれないが、女性は分かりにくいからななどと思いながら、彼女を見ている
と、なぜか、心を見透かされる気がする。案の定、彼女は話した。

「 お目覚めかしら? 移調 唱太くん? 」

「 えっ、なんで、僕の名前を？ 」

「 初対面なのに？なぜ、分かるんだろう…。 」

唱太はこくこく頷いて肯定する。彼女は、自己紹介を兼ねて、挨拶をよこした。

「 私の名はメイコっていうの。この娘の姉妹機にあたるわ。」

そういって、ミクの方を見つめ、唱太に向き直る。

「 えっ、じゃあ、貴女も神奏日本から？ 」

「 ええ。そうよ。APA_010003_MEIKO。
“Mind Effective Interface of
Knowledgeable Omniscience”
というのが、正式名称にあたるけど。
精神感応型機工軍師といったところかしら。
こっちにきてから、咲音って苗字も貰ったし…。」

そういって、メイコが、窓の外を遠くに見つめていると。
がらっと扉を開けて巫女服姿の少女が現れる。
メイコは彼女を先生と呼んで、席をゆずった。

「 目が覚めたのね。どう、具合は？」

「 ……。」

「 どうしたの？ 」

「 先生？君が？ 」

どうみても、小学生くらいの年頃にしか見えないけれども、
がつんと拳で、唱太は巫女姿のコスプレ少女にぶん殴られた。

「 命の恩人に対して、失礼な物言いね！ 」

「 いたたたっ。て、何すんだよ！」

「 それだけ、怒鳴れれば大丈夫ね。」

巫女姿のコスプレ少女は、腕を胸元で組み、安心したように
つぶやいた後、ミクの手当てに移る。この人、大丈夫かな。
とか考えていると、メイコがフォローに入った。

「 マスターに任せておけば大丈夫よ。」

「 えっ、マスター？ 」

「 そうよ、私たちの躯体は工学的な機体というよりも、
錬金術的な機体といったほうが近いの、だから…。」

巫女姿のコスプレ少女が、ミクに霊気を送り、治療を施している様子を
唱太に見せつつ、説明を続ける。

「 ああやって、心霊的治療を行ったほうが効果があるのよ。」

「 へぇ… 」

唱太は、感心したようにつぶやくと、ミクはようやく目を覚ました。

「 マスター。ここは？ 」

「 診療所よ。安心して。」

誰かな？という眼差しで、ミクはメイコを見つめる。スキャンして解析してみる。
どうやら、同系機らしい。外(ほか)にも、存在してしていた、初めて見る同属に、
ミクは戸惑いながら、好奇心も兼ねて、彼女に尋ねた。

「 あなたは？ 」

「 私は APA_010003:MEIKO。メイコよ。
製造順で、貴女のお姉さんということになるけどね。」

「 お姉さん？ 」

「 そうよ。よろしくね。」

そういって、握手をミクに求める。ミクもそれに、戸惑いながら、応じた。

3）

さてと、その様子を見届けて、互いに自己紹介からはじめる。

「 あぁ、そういえば、自己紹介が済んでなかったわね。
ここ、空音心霊診療所の所長で、メイコのマスターの、
空音 羽嫩(そらね はのん)よ。はのんで、いいわ。」

「 ミクのマスターの移調 唱太です。よろしく、はのんさん。」

一通り、挨拶と握手を済ませると、巫女姿の少女は、唱太に尋ねる。

「 それで、あんな所で何があったの？ 」

「 実は… 」

唱太は、事情を説明した。母親が、ノイズに乗っ取られたこと。
ミクのドミニオン・ノートが、まるで歯が立たなかったこと。
敵の反撃を受けて気絶したこと。敵に逃げられたこと、などを
一通り、話を聞いてから、巫女姿のコスプレ少女は、斜めの所
から、唱太に尋ねた。

「 お母さん。家を出ちゃったの？ 」

「 ええ、ミクと話していたら、急に逆ギレして。」

「 そのときの様子を話してみて？ 」

唱太は、ミクを家に連れて行ったところ、彼女の正体が気になったらしい

母親と、なんだかんだで親子ゲンカになって、それをとめようとして、
　ミクが、歌を歌ったら。興味を抱いたらしい母親が、あれこれと聞いているうちに
逆ギレして、出て行ったと、主観的に述べてみる。
　母が、壊滅的音痴であることをも含めての説明である。

「　なるほどね…　」

「　どうしたんですか？　」

「　貴方のお母様にノイズが、憑依した訳がわかったわ。」

「　浄化法もね。」

「　本当ですか！　」

　巫女姿のコスプレ少女。空音　羽嫩(そらね　はのん)というらしい彼女は、
ミクに近づくと今回はここで休んでいるように言い含める。
　ミクの不可思議な存在が、今の事態を生んでしまったのだから、当然の処置である。
　責任感の強いミクは、自分もどうしても、珀世を助けたいといってきかなかったが、
唱太の説得で、渋々ながら応じることになった。
　ミクは自分のせいで、珀世がああなってしまったことに、激しくおちこんでしまったが、
珀世を元に戻して、何としてでも仲直りさせないといけない。
　そう思って、唱太も参戦を希望する。ミクと違って、案件は、あっさりと受理され、
私は、ここでミクちゃんを見ているからといって、空音も居残り組になり、
結果。唱太とメイコで、ハクに挑むこととなった。

《つづく》